
土曜日

斑鳩憶良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

土曜日

【Nコード】

N5335BA

【作者名】

斑鳩憶良

【あらすじ】

ピクシブにも乗せてます。

もぐもぐもぐもぐ。

土曜日です。土曜日のお昼です。

インスタントハヤシライスを食べました。

熱かった

お母さんがまだなにか食べたいと言って僕の友達からのお土産だという柿の種を持って来ました。

誰からもらったんだっけ？

お母さんは日本酒のつまみに柿の種を食べています。

柿の種って柿からとれたのかなあ

みんなでぼりぼりぼりぼり・・・・・・・・・・・・・・・・。

あなさ・・・・・・・・あの・・さ。

まごついたキミの問いかけにお兄さんが何かと聞きました。お兄さんの座っている椅子がギシギシと音をたてる。

えと・・・・・・・・んん。

どうした？忘れちゃったのか？

あ．．うん。

そっか．．ならしょうがないな。

なんだか質問が間抜けに見えて、ぼくはやっぱりやめました。

ぼりぼりぼりぽ．．．。お母さんがあくびをしました。

日が差し込んできました。白い部屋の中の薄い影を抜つように部屋を染めています。

お兄さんは頻りに何かをお母さんに話かけています。

日が差してきたなあ

お母さんはお兄さんの話の合間に日が差してきたわねと、まぶしそうに表情を一瞬歪める。

僕もまぶしいので目を細める

無音の世界にお兄さんの声と柿の種の碎ける音、時計の音が響きま
す。あのさあ．．．、ぼりぼり．．、かち、かち．．、それでね．．
．．．

ぼり。ぼり。

かち、かち。

ぼり、ぼり。

かち、かち。

ふいに、お兄さんが話しをやめました。

外はさむそう

部屋の大きな窓からは外の冬の澄み切った空が晴れ晴れと浮いています。それを見たお兄さんが懐かしむように目を細めました。

小さな雲がひとつ．．．ふたつ．．．

お兄さんがまた話を始めました。今度はどこかの話を話しています。

みいつつ？

あそこの庭にこの前また行ったよ。紅葉も終わった時期だったんだけど、空気は澄んでいてきれいだった。

みつつ、羊の家族三匹いつしょ

庭の静かな川にはきれいで大きな白い鳥が下りてきてね。

ぽりぽり。頭をかく。帽子をぐいっと深くよせる。

そこでスケッチをしてきたよ。

ぽりぽりぽりぽり．．．からからから．．．くるり。

お母さんもうなずきながら何かを言った。

柿の種をまわすのに夢中で聞いてなかった

お兄さんにもかまたうなずいている。

僕もうなずく。うんうん。

お兄さんは言った。秋の紅葉も綺麗だけど、冬の庭もきれいだ。空気が・・・いて、・・・たように・・・。秋とはまた違った感じが・・・。お母さんも同調してうなずきなにかを話している。

早口になってぼくはよくわからなかった。

お兄さんも少しお酒を飲んだ。

どうちがいの？。

ん・・・そっか、キミはそこに行ったことがなかったんだよね・・・

お兄さんは少し寂しそう。

いいかい。秋の庭は艶やかに煌びやかに葉が色付きはじめ、山そのものをしつかりと秋の空気の中に浸して染めていく。葉は黄色や茜色、真つ赤な朱色や・・・少し寂しいけど茶色とかに徐々に色付き、僕たちの目を楽しませてくれるんだ。

ぽりぽりぽりぽりぽりぽりぽりぽりぽりぽり。

でもいずれ散っていく。紅葉は短い時間しか色付けないんだ。そこには常に流れるものを感じる。時間の動き。時は流れ続けるものなんだってね。人によつては冬は木々が死んだようにも見えるから、葉が散っていくのを寂しそうに見送っていく人もいる。

言葉が難しくてよくわからないけど、お兄さんの優しい口調や表情から、なんとなく頭の中に情景が浮かんでくる。

でも、冬がくるのはぜんぜん寂しくもないんだよ。さっきも言ったけど、冬には冬の魅力や綺麗さがある。

うん

冬の景色は世界がどんなに静かかを教えてくれる。

冬はとても静かで、寒くて、それでいて澄んでいる。そう、温度が目に見えて情景を、空気の色を、風の音を、凍らせていく。太陽の光に当てられたその状況は時間が、世界が止まったように見えるんだ。

かち、かち。

帽子をかぶり直すして、その情景を頭に描いてみた。その光景はどこかで見たような気がする、でも重要なところが違う気がした。

ぽり、ぽりぽりぽり。お兄さんは思い出したように柿の種をつまみ始めた。お母さんはいつの間にかソファに寝てしまっている。狭そうに寝返りをうつ。日は少し弱まり部屋の中に雲の流れを感じさせる。

なんとなくしかわからなかった。ごめんね。

ん、そつか……もう難しいか……。まあ、わからなくて大丈夫。すぐに見に行けるようになるさ。今年だって春先にはその庭に行けるかもしれない。

ホント？

ああ、元気になってこんな部屋から出れたらな。お兄さんは部屋を恨めしそつに見渡す。

「元氣だよ僕？元氣だから今から庭見にいけるよ？」

ギシギシと音のなるパイプ椅子

?

. っそうだな。でもまだ寒いから、 もう
 少し大きくなつてから見に行こうな。今度は春の庭について教えて
 やろうか 。

かち、かち、かち、かち。

すーすー。

日は茜色の閃光にかすれ、空は天から染み出した果てしない黒に染まろうとしている。ハヤシライスのかすかな香りが時間の薄れを感じさせる。

すーすー。

いつの間にか母が起きて、代わりにキミが寝てしまったようだ。

すーすー。

言葉にならない嗚咽が耳を通過する。

すーすー。

寝ているキミにすがりつき母が泣いている。毎晩、毎晩キミが寝るところで一晩中泣きじゃくっている。

すーすー。

もう、それを聞いてもなにも感じず表情に変化はない。心にも蓋がしまり、悲しみは深い深い井戸の奥底から聞き取れないこだまなり、空気を震わせる。

すーすー。

ギシギシッ

すーすー。

部屋の中央大きな白すぎるベッドは母が強く喘ぎ泣くたびに振動に耐え切れずギシギシと泣く。

表情に変化はない。ただただ涙が流れるだけ。

すーすー。

寝て起きたらまた、時間をさかのぼり、心だけ。一緒に羊雲を追い、あの庭を駆けた幼き時のキミに戻っているのだろうか。

すーすー。

兄さん。

すーすー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5335ba/>

土曜日

2012年1月14日19時45分発行